東北地方太平洋沖地震の震災ボランティアに参加して

直方支部　直方県土整備事務所　有澤謙一

平成２３年３月１１日、東北地方太平洋沖地震が発生しました。この地震はマグニチュード９．０、死者・行方不明者は約２万人と戦後最大の自然災害となりました。地震そのものの揺れによる被害の他にも、大津波、液状化現象、地盤沈下などにより東北と関東の広大な範囲で被害が発生しました。また、東京電力福島第一原子力発電所では、大量の放射性物質の放出を伴う重大な原子力事故に発展しました。

この震災のボランティアとして４月１０日～１７日の７泊８日の日程で参加させていただきました。地震が発生して約一ヶ月後で、ようやく現地もボランティアの受け入れ体制が整ってきたという程度であり、ボランティア内容は未確定で、出発前は支援場所も宮城県北部ということしか確定していないという状況でした。宮城県までは、仙台空港が地震の影響で利用できなかったため、羽田空港からはバスで６時間かけて移動しました。宮城県に近づくにつれ、屋根にブルーシートが被せてある家や自衛隊の災害派遣車が多く見られ、海岸から随分遠い場所であるにも関わらず津波で流されてきた瓦礫が見られ、地震の被害の大きさを感じました。宮城県の甚大な被害があった場所に入り、実際に自分の目で見ると、テレビ報道である程度想像はできていたものの唖然としました。津波で全て瓦礫の山になった町、焼け焦げた建物や車、火葬場が被災したため土葬場として使用されている広場など、言葉を失いました。

私が行ったことは２４時間ごとの交代で、一番被害の大きな石巻市の渡波中学校という避難所で２人１組での避難所運営をするというものでした。渡波中は海沿いの学校であるため、中学校を残して周辺は瓦礫の山になっているすさまじい場所でした。中学校は体育館と二つあるうちの一つの校舎が津波で破壊され、残された一つの校舎も二階まで津波の影響があったため、避難者はその３階のみを使用していました。そのため避難者を多く受け入れることができず、避難者は５４人と比較的少数でした。また、電気・水道・ガスな

どのインフラが全く回復しておらず、情報はラジオから、水は給水車から、電気は小さなバッテリーがあるだけなので夜は真っ暗という状況でした。そもそも、この中学校が避難所になっているのも不思議なくらいの場所なのですが、震災後は治安が悪くなり、少しでも家の近くにいたいとの思いや、知り合いの多い所にいたいという避難者の思いがあるそうです。

避難所の運営業務は、自治体の職員は私たち２人以外はおらず１つの避難所を任されており、直接的に避難者と関わることができ非常に有意義でした。避難者と話し合い避難所をよりよくしていく事、市役所や学校の考えと避難者一人一人の考えの仲介が私たちの役割でした。とはいえ１か月経った今、避難所での生活のルールやそれぞれの役割分担は決まっており、基本的には避難者が自主運営をしているという状況でした。これは避難者が元々親しい関係であったからこそであり、コミュニティーの大切さを感じました。実際、他の避難所はもっと混乱していたようで、学校の開始に伴い避難所を移転するという大きな問題がありましたが、各人の避難所を一方的に指定してコミュニティーを崩すことは不可能であり、慎重に協議して決めなければいけない課題であると感じました。

また、私たちが訪れる１週間前までは物資も十分になく、２週間前になると食べ物は落ちてあるパン、風呂にも２０日間入っていないという状況だったそうです。ある程度落ち着いてからでないとボランティアを受け入れる体制も整わないため、本当に苦しい時には手助けが難しいことに歯痒さを感じました。今回ボランティア活動を行ってみて、自分の無力さを感じさせられる事もありましたが、現地で直接被災者とふれあうことで様々なことを感じることができました。また一概にボランティアと言っても様々であり、炊き出しや物資の運送などはもちろん、散髪をしますというような方もいらっしゃいました。自衛隊や医者という特別な免許を持っていなくても、私たちにできることは多くあると思いました。

今でも原発の危険区域に入っている地区や、自宅が全壊してしまった方も多くおり、長期の避難生活が避けられない状況が続いています。避難者の多くは自立に向け、まだまだ先の見えない戦いが続きます。震災から半年以上たち私たちの記憶から薄れつつありますが、この震災の教訓を忘れてはならないと思います。土木技術者としてこのような災害が発生した時に、被害を最小限に食い止められるよう考えていく必要性を感じました。